高橋透氏の遺稿について

本欄に掲載する『量子コンピュータの哲学（メモ）――量子コンピュータとデリダ哲学』は2021年7月7日に逝去された高橋透氏の遺稿である。氏は本学会の設立時から会員であったが、2010年に退会された。ご遺族から遺稿を託された3名のうち、2名が本学会の会員であったという事情に加えて、原稿の内容は氏の長年にわたる研究の集大成ともいえるもので、本誌に掲載するにふさわしい内容と水準をもつものと思われた。本誌に掲載される原稿は原則として会員のもののみであり、非会員の原稿は編集部が「掲載依頼」をした場合に限られているが、編集委員会での協議を経て、本遺稿を掲載するに至った。

高橋透氏の研究経歴をごくおおまかにふりかえっておく。氏は1997年にドイツ思想ならびにフランス現代思想の専門家として早稲田大学第一文学部文学科ドイツ文学専修講師に着任された。当時氏は『ニーチェ事典』（弘文堂、1995年）の項目執筆や、「ニーチェ――孤独への道とその陥穽」（『ドイツ文学』第94号、1995年）ならびに「ニーチェ――深淵の書:『善悪の彼岸』の作品構成をめぐって」（『ワセダ・ブレッター』第3号、1996年）といった専門的な学術論文の執筆と並行して、一般読者向けの思想雑誌に幾度も論考を寄稿している。「ニーチェに警告するデリダ」（『大航海』1996年第12号）、「永遠回帰そして／あるいは静止状態の弁証法――エコ＝テクネー論の試みに向けて」（『現代思想』1998年11月臨時増刊号「総特集 ニーチェの思想」）、「差延するテクノロジーと差延するエコロジー――デリダ『テレビのエコグラフィー』を出発点として」（『現代思想』1999年3月号「特集　デリダ」）、「他者としての神、他者としての自然――ハイデガー：《ピュシス》と《聖なるもの》の脱構築の試み」（『現代思想』1999年5月臨時増刊号「総特集　ハイデガーの思想」）などがそれにあたる。

これらの論考に顕著なのは、ドイツあるいはフランスの思想家たちの議論を土台としながら、現代の具体的な現象や問題、とりわけテクノロジーの可能性を思弁的に解明しようとする氏の姿勢である。古代ギリシャよりみられる自然と技術の二項対立を突き崩しながらその関係を問いなおすこと、いうなれば「技術」という概念そのものを、西洋哲学の伝統をしっかりとふまえながら脱構築すること――それがこの時期における氏の一貫した関心であったといえる。しかし2000年代にはいってまもなく、自身の思考をより具体的に展開するのにふさわしい対象としてサイボーグを見出すと、氏の研究は大きく様変わりする。

遺稿でもかなりの紙幅をさいて言及されているジャック・デリダ（著）／ジョン・D.カプート（編）『デリダとの対話――脱構築入門』（法政大学出版局、2004年）を黒田晴之

ならびに胡屋武志会員、そして衣笠正晃氏との共訳で刊行する1年半ほど前、高橋氏はフィリップ・ラクー＝ラバルト『メタフラシス――ヘルダーリンの演劇』の訳書（吉田はるみ氏との共訳、未來社、2003年）を出版している。そのあとがきでは、「神に酔える」詩人ヘルダーリンにかんする思想書を「テクノ・サイエンスの現代」において翻訳することの意義が論じられているのだが、まさにこの直後より、のちに『サイボーグ・エシックス』（水声社、2006年）にまとめられることになる各種論稿が継続的に発表されることになる。

2007年には訳書としてダナ・ハラウェイ／シルザ・ニコルズ・グッドイヴ『サイボーグ・ダイアローグス』（北村有紀子氏との共訳、水声社）を、また、翌2008年には『サイボーグ・フィロソフィー――「攻殻機動隊」「スカイ・クロラ」をめぐって』を刊行。これ以降の仕事においては、サイボーグ技術や臓器移植をはじめとするバイオ・テクノロジーの進展によってゆらぐ近代的な人間／主体概念の脱構築、ならびに新しい生命倫理の模索といった課題を中心に、現代の問題に取り組むための手段として――あるいは大衆文化やバイオ・アートなどによって描き出される未来の生のイメージを解読するために――西洋哲学を参照するという手法がとられるようになる。

大橋良介（編）『ドイツ観念論を学ぶ人のために』（世界思想社、2006年）に収められた「ドイツ現代哲学とドイツ観念論――ウルリヒ・ベックの『リスク社会論』」の執筆事情は氏の仕事にみられるこうした転換を象徴的に物語っている。ドイツ観念論の入門書として企画された本書は、実際に出版されるまでに9年の月日がかかった。当初、高橋氏はドイツ観念論の展開とその受容にも目配りをした論考――おそらくはハイデガー論――を提出したものの、出版の目処がたった折にはすでに古びてみえたため、最新の知見に基づいて、改めて別の論考を執筆したという。そうした経過を経て掲載された本論文は、事実上ウルリヒ・ベック論であり、ベックの思想の現代的な意義を強調するために、ヘーゲル哲学の限界が指摘されるという構成になっている。

『ドイツ文学』第127号（2005年）に掲載された「沈黙する動物たち」からも、この時期に氏の研究手法が大きく変化したことがよみとれる。これよりちょうど10年前に同誌に掲載された論文が専門的なニーチェ論であったのに対して、本論文でとりあげられているのは、ヴァーチャル・リアリティ技術を用いたエドワルド・カッツの作品『夜よりも暗く』である。そしてこの作品をてがかりとして、バイオ・テクノロジーの進展によってますます曖昧になる人間と動物との関係が、ニーチェならびにベンヤミンの思想を介して考察されている。

このように、高橋氏の研究はドイツ思想から出発しながらも、次第に従来の枠組みにはおさまりきれないものになっていった。氏が中心となって編集された『規則的、変則的、偶然的――大久保進先生古稀記念論文集』（朝日出版社、2011年）掲載の論文「電子マネー、ニューロマーケティング、そして生のエコノミー」では、自身のサイボーグ研究を背景に、テクノロジーによる経済と人間の欲望との――ひいては生そのものとの――一体化が論じられているが、そこではもはやドイツの思想家が言及されることはない。わずか

にエピグラムとして、『偶像の黄昏』「ある反時代的人間の遊撃」第49章からの引用「ゲーテは生から乖離せずに、生のなかへと身を置いた」がかかげられているのみである。

高橋氏は同論文集の編集中に早稲田ドイツ語学・文学会を退会した。その後は独自の思想をより積極的に展開すべく活動を続け、2017年に『文系人間のための「AI」論』（小学館新書）を上梓。近年は量子力学について学び、さらなる展開の構想をねっていたと思われる。遺稿からよみとれるのは、2003年頃を境に本格化した現代テクノロジーの哲学的究明と、1990年代にまでさかのぼる「古典」哲学の研究とをより密接に結びつけようとする企てである。というのも、本稿では、量子コンピューター論をデリダの差異の哲学と接続するという試みを中心に、その前提となるカントとヘーゲルの認識論の違い、さらにはそれをふまえたハイデガーの存在論が批判的に論じられているからだ。

本稿は「メモ」にとどまらざるをえなかったことが高橋氏自身によって記されている。病床で執筆されたため、参考文献の出典や図の引用、概念の詳細な説明や脚注の細かな記述にまで手が及ばなかったためである。しかし、氏は内容に関しては「完成」したものと考え、ご遺族にその旨をくりかえし伝えていた。それはおそらく、論旨を最後まで納得いくように展開できた、という意味であろう。しかしまた、生涯にわたる研究をふりかえり、その知見を集約することで、来たるべき哲学の構想をかかげることができた、という思いもあったのではないだろうか。

なお、掲載にあたっては、荒又雄介副編集委員長を中心に、胡屋武志ならびに荒井泰会員が原稿の整理を行ったが、加筆等は最小限にとどめた。また、本前書きの作成に際しては前川一貴会員のお力を借りた。

副編集委員長　小　野　寺　賢　一